保育士の離職・就業継続の選択要因

－多次元尺度法による分析－

○松浦美晴[1)]・上地玲子[2)]・井岡本響子・岩永　誠
([1)2)]山陽学園大学総合人間学部生活心理学科・天理医療大学医療学部看護学科・広島大学大学院人間社会科学研究科)

目的

保育士の早期離職問題の解決策を探るため，離職・就業継続の行動選択の経験の異なる保育士が選択を行った理由を調査した。

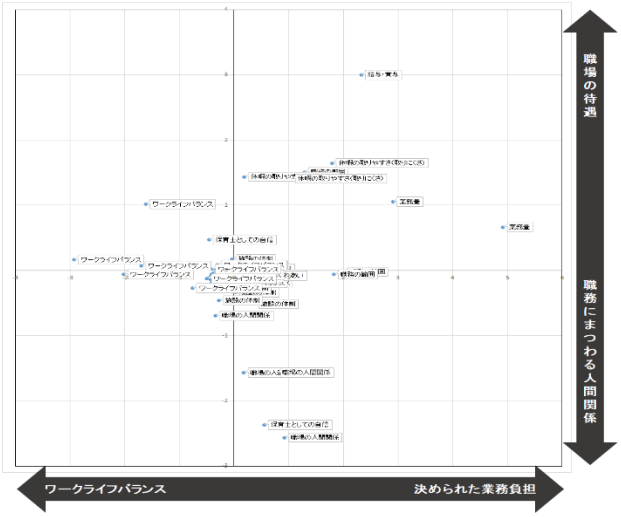
方法

責任発表者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を受け，調査会社を通じたインターネット調査を行った。【対象者】　調査会社のモニター登録者の中で，保育士資格を保持し保育士として勤務経験のある約 1,000 名を対象とした。性別は問わず，年齢は 20 歳以上とした。【質問項目】次の 5 つから直近の行動選択経験を選択するよう求めた。①「勤務する施設を変えたいと考えたが，考え直し，変えないことにした」，②「勤務する施設を変えた」，③「保育職そのものを辞めたいと考えたが，考え直し，辞めないことにした」，④「保育職そのものを辞めた」，⑤「勤務する施設を変えたくなったり，保育職を辞めたくなったりしたことはない」。【行動選択要因】「（選択の）理由に関係のあるもの」58 項目，「（選択の）理由に関係のある，あなたの気持ちや考え」59 項目から，該当する項目にチェックするよう求めた。【分析方法】行動選択要因のチェックされたか否かの 2 値データを用いてクラスター分析（Ward 法），多次元尺度法（MDS）を行った。続いて，選択経験毎に MDS を行った。分析には SPSS for Windows ver.25 を使用した。

結果と考察

今回は，就業継続の選択経験④「保育職そのものを辞めた」の結果のみを報告する。選択経験①から⑤を全て込みにした結果との比較を述べる。図は④のみの MDS による布置図である。項目名を項目が所属するクラスターへの命名に書き換えてある。図を掲載していないが全て込み，すなわち全体の第 1 軸は，正と負の布置から「職場の待遇―ワークライフバランス」，第 2 軸は「決められた業務負担―職務にまつわる人間関係」と解釈ができた。図の第 1 軸は「決められた業務負担―ワークライフバランス」，第 2 軸は「職場の待遇―職務にまつわる人間関係」と解釈ができた。「ワークライフバランス」の対極は，全体では，「職場の待遇」であるのに対し，保育職を辞めた場合は，「決められた業務負担」であった。また，「ワークライフバランス」の布置が異なった。具体的には，全体の「ワークライフバランス」の布置が狭い範囲に集中したのに対し，図では，第 1 軸の負の方向に「ワークライフバランス」が広がった。負の極に布置する具体的な項目は，「結婚」続いて「妊娠・出産」「転居」であった。ワークライフバランスに関する事項の中でも比較的大きなライフイベントが，対する「決められた業務負担」に干渉される関係にあると考えられる。

ここで，保育職を辞める選択について，次の考察が可能である。「職場の待遇」が職場としての施設に依存するのに対し，「決められた業務負担」が保育職という職種に依存するのであれば，ライフイベントへの干渉を転職ではなく，保育職そのものの撤退によって回避しようとする選択につながると考えられる。このことを確認するために，②「勤務する施設を変えた」との比較が必要である。さらに，③「保育職そのものを辞めたいと考えたが，考え直し，辞めないことにした」，⑤「勤務する施設を変えたくなったり，保育職を辞めたくなったりしたことはない」との比較を進めてゆく計画である。



本研究は，JSPS 科研費 19K02603，ウエスコ学術振興財団研究資金助成事業，山陽学園大学・山陽学園短期大学学内研究補助金の助成を受けた。